

嗜好から方法へ

「失われた時を求めて」の話者の心的傾向性について

織田年和

友情が不可能であり、愛が不可能であり、スノビズムが不可能であり、生活になんらの意味がなく、ただ文学作品の素材としてのみかろうじて意味のあるような世界。芸術を除く一切が不可能の烙印を押された世界。これが、作家以外のどのような存在にもなることのできなかった「失われた時を求めて」の主人公＝話者の世界である。すなわち、「失われた時を求めて」は一人の人間にとっての生（活）の不可能性が、文学の可能性に変わってゆく過程を主題とする。話者にとって文学とは、生（活）が不可能でなかったなら、可能にならなかつたような性質のものである。話者の文学の可能性は、生（活）の不可能性から生まれてくる。

したがって、「失われた時を求めて」を批評するためには、生（活）の不可能性と文学の可能性を同時に考察することのできる視点を設定し、この二つが話者においてどのように結合しているかをさぐる必要がある。話者にとってなぜ生（活）は不可能であるのか？いいかえれば、彼の一生が失望の連続であるのはなぜか。話者には生（活）への無能性とでも形容すべき性格があるのではないか。ジェラルド・ジュネットの ≪le goût de Proust pour la vision indirecte, ou plutôt son incapacité marquée à la vision directe≫（1）という指摘は、この間に肯定で答えるためのひとつの手掛りを提供してくれる。ぼくの考えによれば、話者の生（活）への無能性はこの ≪le goût pour la vision indirecte≫ への心的傾向性からきており、プルーストは小説の最初からすでに話者をこの心的傾向性をもつ者として描いている。

(...) tout d'un coup un toit, un reflet de soleil sur une pierre, l'odeur d'un chemin me faisait arrêter par un plaisir particulier qu'ils me donnaient, et aussi *parce qu'ils avaient l'air de cacher, au-delà de ce que je voyais, quelque chose* qu'ils invitaient à venir prendre et que malgré mes efforts je n'arrivais pas à découvrir. Comme je sentais que cela se trouvait en eux, je restais là, immobile, à regarder, à respirer, à *tâcher d'aller avec ma pensée au-delà de l'image ou de l'odeur*. (...) je m'attachais à me rappeler exactement *la ligne du toit, la nuance de la pierre, qui (...) m'avaient semblé pleines, prêtes à s'entr'ouvrir, à me livrer ce dont elles*

話者には事物がその物自体の奥に、通常感覚には感じることでできない神秘的ななものがあると感じる心的傾向性 — 隠された物への嗜好 — が明らかにある。彼にとって価値があると思われるのは、「イメージあるいは匂いの彼方」に存在すると想定されたなものかであって、通常感覚によって感受されたあるがままの事物自体は、この隠されたなものかの「ふた」としてしか意味をもたない。物の奥に隠された本質とでもいうべきものを想定せざるをえないこの種の心的傾向性は、あるがままの事物を知覚し受けとることを妨げることに通ずるから(3)、生(活)への無能性につながる。物は秘密を隠していると思われるかぎりにおいてしか、彼の関心の対象にならないからである。一見すると、事物の直接性自体に魅惑されていると思われやすいさんざしの観照についての一節でも、このことはやはり言えるのであり、話者を魅きつけているのはそこでもやはり直接的に感受されるあるがままのさんざしではなく、その物の奥あるいは彼方にひそむ秘密である。

Mais j'avais beau rester devant les aubépines à respirer, à porter devant ma pensée qui ne savait ce qu'elle devait en faire, à perdre, à retrouver leur invisible et fixe odeur (...), elles m'offraient indéfiniment le même charme avec une profusion inépuisable, mais sans me laisser approfondir davantage, comme ces mélodies qu'on rejoue cent fois de suite sans descendre plus avant dans leur secret. (I, p. 138)

この心的傾向性は話者のコンプレーでの幼年時代のみならず、彼の一生を縦糸のように貫いていて、話者は彼が会おうあらゆる対象を、これを通して受けとるのである。話者にとっては、「事物、人々、名前は容器なのであって、そこからまったく別のかたちの、まったく別の性質の度はずれな中身を引っぱりだす」(4)ようなものである。この心的傾向性が名前にむかつてはたらくと、貴族とその名あるいは「土地 — 土地の名」における土地とその地名は有機的な関係で結合されているとのクラテュロスの夢想としてあらわれ、事物にむかうと「屋根、石の上の日ざし、道の匂い」の観照にみられるような現象の彼方をめざす態度となるが、話者の生(活)にとって決定的な意味をこの心的傾向性もつのは、これが彼の基本的な二つの欲望 — ひとつは女への愛欲としてあらわれ、もうひとつはスノビズムとしてあらわれる貴族への憧憬 — を規定するからである。そして地名についての夢

想がその地への実際の旅行と、そしてまたブリショの語源学によって冷水をあびせかけられ、物の隠された神秘を追求した果ては「樹木よ、おまえたちはもうなにも私に語りかけない。冷えてしまった私の心はおまえたちのことばがわからない(■, p. 885)」という失望にいたるように、この心的傾向性は話者の恋愛とスノビズムを挫折にみちびく。この心的傾向性は、話者の愛をきわめて特殊な構造をもつものとし、また彼をスノビズムへと誘う強い性質をもっているのである。スノビズムと恋愛をめぐる遍歴をつうじて、話者は少しずつ生(活)への無能性をもたらすこの心的傾向性を自覚していったのではないか、というのがいまぼくのいんでいる仮説である。そうだとすれば、話者のスノビズム体験と恋愛経験を分析すれば、生(活)の不可能性と因果関係にある隠された物への嗜好がどのように話者の文学を可能としていくのか、この過程を明るみにだせると思う。

ブルーストは最初から話者をスノビズムに浸され、スノビズムの内部にいるものとして読者に示している。話者のスノビズムがア・プリオリの事実として提示されるのは、事物の中の隠された神秘への嗜好がそうであるのと同じである。しかし、究極的には話者のスノビズムは彼の隠された物への嗜好のひとつの現象形態であり、これに根をもっているのである。

隠された神秘への嗜好という観点から考察すると、スノビズムはどのような構造をあらわすのか。つまり、話者という一個人においてスノビズムのメカニズムはどのように機能しているのか。これに答えるには、なにがスノップ(=話者)を貴族社交界に魅きつけるのかを考えてみればよい。「失われた時を求めて」におけるスノビズムは、いわば無償の行為なのであって、スノップ(=話者)は貴族との社交を現実的利益のために求めるのではない。ましてや貴族の個人的魅力や人格的魅力のせいではない。つぎの一節は話者の心的傾向性がスノビズムと結びつくありさまを示しており、純粹状態におけるスノビズムと形容できるものであり、話者のスノビズムがどのように貴族なるものにむかって作動するかをよく語っている。

Je savais que là résidaient des châtelains, le duc et la duchesse de Guermantes, je savais qu'ils étaient des personnages réels et actuellement existants, mais chaque fois que je pensais à eux, je me les représentais tantôt en tapisserie, comme était la comtesse de Guermantes dans le «Couronnement d'Esther» de notre église, tantôt de nuances changeantes, comme était le Gilbert le Mauvais dans le vitrail (...), tantôt tout à fait impal-

pables comme l'image de Geneviève de Brabant, ancêtre de la famille de Guermantes (...), enfin toujours enveloppés du mystère des temps mérovingiens et baignant, comme dans un coucher de soleil, dans la lumière orangée qui émane de cette syllabe: «antes». (I, p. 171)

話者のゲルマント夫人への夢想は二つの特徴をもっている。ひとつは彼女を中世の神秘に包まれた歴史上のあるいは伝説上の人物として想像すること、もうひとつは Guermantes という名前が話者に喚起するイメージの肉体化として想像すること。いずれにしても、話者を魅了しているのは可視的な一貴族女性ではなく、彼女は仮象にすぎず、この仮象に隠されたこの仮象をきっかけとして彼の想像のうちに生まれるなにか他のものである。むろん失望は彼が現実のゲルマント公爵夫人を彼の目で見たときに訪れる。しかし、現実の公爵夫人が彼の夢想とまったく違ったものであるさまをまのあたりに見つつも、

(...) cette dame, en son principe générateur, en toutes ses molécules, n'était peut-être pas substantiellement la duchesse de Guermantes, mais (...) son corps, ignorant du nom qu'on lui appliquait, appartenait à un certain type féminin qui comprenait aussi des femmes de médecins et de commerçants. (I, p. 175)

と一瞬考えてしまうほど、話者のゲルマント公爵夫人の神秘性への信仰は根づよいのである。彼女が現実の生身の女性である事実はこの信仰を完全に打ち壊すことができないばかりか、逆にこの信仰は現実のゲルマント夫人を彼の夢の方へひきよせてくる。「私があんなにしばしば夢みたあのゲルマント夫人は、それが私の外部に実際に存在しているのをいま私が目にしているときも、そのためにいつそう大きな力をふるって私の想像力の上にはたらきかけ、その想像力は、期待とはあまりにもかけはなれた現実に当面して一瞬機能しなくなったが、たちまち反動的に活動をとりのどして、私にこう語りはじめた、『シャルルマーニュ以前から早くも栄光にかがやいたゲルマント家は、家臣にたいする生殺与奪の権をにぎっていたし、ゲルマント公爵夫人はジュヌヴィエヴ・ド・ブラバンの後裔である。彼女はここにいる人たちの誰も知らないし、誰もとも知りあいにしようとはしないだろう。』」(I, pp. 175-176) (5)

このコンプレの教会でゲルマント公爵夫人を初めて肉眼で見、現実の公爵夫人

と夢想された公爵夫人との落差からくる失望にもかかわらず、現実の夫人のなかになんとか夢みられた公爵夫人の痕跡を見いだそうとする話者の努力は、「形、匂い、あるいは色の印象」が「その背後に隠しているもの」(I, p.179)を認識しようとするあの努力となんと似ていることだろうか。

ラモン・フェルナンデスが指摘するように、注意すべきなのは、このようなゲルマント夫人への想像力のはたらき方が幼年時代のみならず、これ以後の話者のもの見方をも規定していることである(6)。話者がヴィルパリジ侯爵夫人のマチネでゲルマント夫人をつぎのように見るとき、彼の目にうつる公爵夫人像は、幼年期に夢みられたそれとはたしてどれほどの違いがあるのだろうか。

Mme de Guermantes s'était assise. Son nom, comme il était accompagné de son titre, ajoutait à sa personne physique son duché qui se projetait autour d'elle et faisait régner la fraîcheur ombreuse et dorée des bois Guermantes au milieu du salon, à l'entour du pouf où elle était. Je me sentais seulement étonné que leur ressemblance ne fût pas plus lisible sur le visage de la duchesse (...). (II, p. 204)

可視的な彼女の姿に追い求める神秘が発見できないとなると、話者は追求の対象をゲルマント夫人を包み隠しているゲルマント家のサロンにむけ、

Et cela m'était d'autant plus nécessaire de pouvoir chercher dans le salon de Mme de Guermantes, dans ses amis, *le mystère de son nom*, que je ne le trouvais pas dans sa personne quand je la voyais sortir le matin à pied ou l'après-midi en voiture. (II, p. 28)

彼女のサロンに迎え入れられることと、求める神秘の発見を同一視するまでになる。

(...) je me disais que si j'avais été reçu chez Mme de Guermantes, si j'étais de ses amis, si je pénétrais dans son existence, je connaîtrais *ce que sous son enveloppe orangée et brillante son nom enfermait* réellement, objectivement, pour les autres (...). (II, p. 30)

そしてこの願望がかなえられたとき、話者を待っているのは決定的な失望だけである。

ゲルマント一族をまだ実際に知らない時期の話者のスノビズムは、想像された貴族と現実におけるそれとの落差に気づいていないゆえに、いうならば幸福なスノビズムである。話者のスノビズムは、現実の貴族が夢みられた貴族そのままの姿であることを欲する。理論的にいって、彼のスノビズムは、現実の貴族に夢みられた貴族のどのような痕跡も認めることができない事実を話者が認めようとしないうちで、可能である。この意味において、話者のスノビズムは夢みられた貴族像をあるがままの貴族の中に発見しようとする絶えまない苦しい努力である。すなわち、『ゲルマント家の方』全体にわたるゲルマント公爵夫人をめぐる話者のスノビズムの軌跡は幼年時コンプレの教会で生身の彼女を見た衝撃と彼女の神秘性への信仰をなんとか和解させようとした試みをより細密により完全なスケールで再現する。この軌跡はゲルマント夫人および彼女を中心とする貴族社交界の中に、隠された神秘を見いだそうとする話者の試みの挫折そして失望の過程である。後述する話者の恋愛経験と比較すれば、同じ失望にいたる過程ではあるが、スノビズムにおける失望は、恋愛にあつては嫉妬が失望にいたる過程を逆戻りさせる働きをにない、或る女への愛の失望は他の女への恋を妨げることはないのに対して、一回的なくりかえしのきかない過程であることに特徴がある。話者のスノビズムはその目的を遂げた瞬間に、貴族の中に夢みられ求められた神秘がその無をあらわにするので、永遠に消失する運命にあるのだ。いいかえれば、事物の可視的な仮象が隠している神秘への嗜好という話者の心的傾向性と彼のスノビズムが一致するのは、スノビズムがまだ目的を遂げぬスノビズムであるあいだだけであつて、話者をスノビズムへと誘った彼の心的傾向性は、目的を遂げたスノビズムとは矛盾してしまうのである。

物の中に隠されたなにものかへの嗜好は、話者の性的欲望をすでに彼の若年より支配しており、この欲望のありかたをそれ以外ではありえぬように規定している。つぎに引用するのは、幼い話者のゲルマント公爵夫人への夢想の一節を純粹状態のスノビズムとすれば、純粹状態における話者の恋をあらわしているとみなせる一節である。

Et la terre et les êtres, je ne les séparais pas. J'avais le désir d'une paysanne de Méséglise ou de Roussainville, d'une pêcheuse de Balbec, comme j'avais le désir de Méséglise et de Balbec. Le plaisir qu'elles pouvaient me donner m'aurait paru moins vrai, je n'aurais plus cru en lui, si j'en avais modifié à ma guise les conditions. Connaître à Paris une pêcheuse

de Balbec ou une paysanne de Méséglise, c'eût été recevoir des coquillages que je n'aurais pas vus sur la plage, une fougère que je n'aurais pas trouvée dans les bois, c'eût été retrancher au plaisir que la femme me donnerait tous ceux au milieu desquels l'avait enveloppée mon imagination. Mais *errer ainsi dans les bois de Roussainville sans une paysanne à embrasser, c'était ne pas connaître de ces bois le trésor caché, la beauté profonde*. Cette fille que je ne voyais que criblée de feuillages, elle était elle-même pour moi comme une plante locale d'une espèce plus élevée seulement que les autres et dont la structure permet d'approcher de plus près qu'en elles la saveur profonde du pays. (I, p. 157)

バルベックの女漁師，メゼグリズあるいはルーサンヴィルの百姓娘を求める話者の性的欲望のはたらきかたと、「屋根，石の上の日ざし，道の匂い」の印象の彼方に隠されたなにものかを求める嗜好とのあいだには明らかに否定できぬ類似性がある。話者は事物の可視的な仮象が隠している秘密を求めるように，森の中の百姓娘，海辺の町の中の女漁師を欲望する。女性が魅力的であるのは，女を包む土地・風景・環境の「隠された宝，深い美」として，この女が出現するときであると話者が考えるのは，彼の心的傾向性に原因があるのだ。彼にとって重大なことに，後年の恋愛経験にまでこの心的傾向性が影響をおよぼしてくる。このおかげで，彼は女を女をとりかこむ環境から切り離し，独立した個別的な他者として愛することができないのである。話者はのちにアルベルチヌへの恋について，

(...) mon amour pour Albertine (...) était déjà inscrit dans mon amour pour Gilberte (III, p. 904)

と確認するが，しかしこの確認は，アルベルチヌへの恋も，ジルベルト，ステルマリア嬢（夫人）への恋も，さらにはゲルマント公爵夫人への恋もすべて話者の恋は或る共通な構造をもち，或る原型的な性的欲望より派生していると極端化できる。話者の女たちへの恋愛は隠された物への嗜好という心的傾向性に根をもっているのだ，彼のすべての恋が或る一つの構造 — その基本的形態は百姓娘を求めてルーサンヴィルを彷徨う話者の欲望によって示されている — をもつのは必然的である。話者の心的傾向性は，彼女たちへの恋以前にすでに確立しているのだ。

J'aurais dû pourtant penser qu'antérieur à chacune était mon sentiment

du mystère où elles baignait (...). C'est ainsi que mon sentiment du mystère avait pu s'appliquer successivement à Gilberte, à la duchesse de Guermantes, à Albertine, à tant d'autres. (III, pp. 988-989)

以下、話者の個々の女たちへの恋にこの心的傾向性がどのように作用しているのかみることにする。

ステルマリア嬢（夫人）： 話者の人生を足ばやに横切っていっただけであったが、そのゆえにかえって話者の恋の構造をより鮮烈に浮きあがらせているステルマリア嬢は、ブルターニュの本質を彼女の内部に包みこみ、肉化していると話者に感じられている。

(...) je croyais sentir qu'elle eût facilement permis que je vinsse chercher sur elle le goût de cette vie si poétique qu'elle menait en Bretagne (...) que pourtant elle contenait enclose en son corps. (I, p. 689)

ブルターニュから切り離されたステルマリア嬢、あるいはステルマリア嬢のいないブルターニュは話者を魅きつけるにはなにかを欠いている。

(...) il me semblait que je ne l'[Mlle de Stermaria] aurais vraiment possédée que là, quand j'aurais traversé ces lieux qui l'enveloppaient de tant de souvenirs — voile que mon désir voulait arracher, et de ceux que la nature interpose entre la femme et quelques êtres (...) afin que, trompés par l'illusion de la posséder ainsi plus entière, ils soient forcés de s'emparer d'abord des paysages au milieu desquels elle vit et qui, plus utiles pour leur imagination que le plaisir sensuel, n'eussent pas suffi, pourtant, sans lui, à les attirer. (I, pp. 689-690)

ジルベルト： ジルベルトへの恋にさいして、このような土地・風景・環境の役割をはたしているのは、若い話者の目には上流社交界とうつつるオデットのサロンつまりスワンの家である。話者のスワン夫妻へのスノビズム的あこがれおよびこのサロンに出入りする作家ベルゴットへの賛嘆は（「ベルゴットはといえば、私がまだジルベルトをみない前から彼女を愛したのは、このかぎりなく聡明なほとんど神のような老人に原因があったのだが、今では反対にベルゴットを愛しているのはジルベルトのおかげなのだ。（I, p. 410）」）、スワン夫妻の娘への恋とわかちがたく結びついている。この結びつきかたにおいて、接吻すべき土地の娘に出会わなければ

その土地の真の美を味わうことができず、逆に娘を真に魅力あるものとするためにはその土地のたすけを借りなければならないという話者の嗜好ははっきりとあらわれてくる。この嗜好をつきつめれば、「しばしば私は、それはその人が私にさんざしの生垣を思い出させるからだということをおぼえずに、或る人にもう一度あいたくなることがあった。(I, p. 185)」というように風景への欲望を女によって満足させ、あるいは女への欲望を風景によって満足させる屈折した媒介性への嗜好にまでたつてしまう。ジルベルトへの恋ではこの嗜好はつぎの形をとる。すなわち、話者は彼女への恋によってスワン夫妻へのスノビズム的欲望を満足させ、逆にスワン夫妻との交際を求めることによってジルベルトへの恋を満足させているのだ。象徴的なことにジルベルトへの恋が終わるとともに、話者はオデットのサロンに出入りしなくなるのである。これはこの二つの欲望が共生関係にあったことを示している。このような恋とスノビズムの共生関係は、話者の思いがゲルマント公爵夫人にむかうときよりあからさまにでてくる。彼のゲルマント夫人への感情は同時にスノビズムであり、恋であって、ジルベルトへの恋とスワン夫妻へのスノビズムが交錯的に共生しているのに対して、ゲルマント夫人への恋とスノビズムは一点に収束し、同一化するのである。

アルベルチヌ： 女と女をとりかこむものの弁証法はアルベルチヌの場合いっそう顕著である。彼女を包む風景はまずバルベックであり、そしてこの海辺の町の花咲く娘たちとよばれる少女グループである。アルベルチヌは最初バルベックの海景の中にはめこまれたものとして話者に現れるが、しかし同時にバルベックを自分の内部に包みこんでいる。

Albertine tenait, liées autour d'elle, toutes les impressions d'une série maritime qui m'était particulièrement chère. Il me semblait que j'aurais, sur les deux joues de la jeune fille, embrassé toute la plage de Balbec. (II, p. 363)

女を風景の肉化したものとして愛する話者の嗜好は、ここでも不変である。風景の中に女を、そして女の中に風景を愛する話者の恋の構造は、アルベルチヌと彼女もその一員である少女グループとの関係においても同様に認めることができる。アルベルチヌは花咲く娘たちを包みこみ、また彼女たちに包みこまれているので、アルベルチヌを愛することは彼女の中のアンドレ、ジゼール等の娘たちを愛することであり、逆にアンドレ、ジゼールたちはアルベルチヌをそ

れぞれの中に含んでいるので、話者はアルベルチーヌへの恋を彼女たちによっても満足させることができる。

Je me plaisais avec toutes, parce que chacune avait pour moi, comme le premier jour, quelque chose de l'essence des autres (. . .). (II, p. 1113)

さらにこのように相互に浸透しあっている娘たち全体とバルベックの海景が、〈女〉と〈風景〉の弁証法的関係にある。

C'était à elles que ma pensée s'était agréablement suspendue quand je croyais penser à autre chose ou à rien. Mais quand, même ne le sachant pas, je pensais à elles, plus inconsciemment encore, elles, c'était pour moi les ondulations montueuses et bleues de la mer, le profile d'un défilé devant la mer. C'était la mer que j'espérais retrouver, si j'allais dans quelque ville où elles seraient. *L'amour le plus exclusif pour une personne est toujours l'amour d'autre chose.* (I, p. 833)

つまり、ステルマリア嬢（夫人）とブルターニュ、ジルベルトとスワン家のサロン、アルベルチーヌ、花咲く娘たちとバルベック、さらにはゲルマント公爵夫人と貴族社交界、これらは対を構成し相互に容器と中身の関係にあつて、たがいに包み包まれあっている（7）。そしてこれが話者の彼女たちへの恋の条件なのであつて、話者の恋が持続するためには、女は（あるいは風景は）「まったく別のかたちの、まったく別の性質の度はずれな中身を引っぱりだす（ドゥルーズ、前掲書）」ことのできる容器である必要がある。話者にとって理想的な女性とは、仮象に隠された本質であるとともに、本質を隠す仮象であるような存在である。或る女がこのような存在であるとき、話者のその女への恋は最大限に燃えあがるのである。

というよりもともと話者の恋とは、「或るひとへのもっとも排他的な愛はつねにまたそれとは違うものへの愛である」という性質なのだから、その女への恋とすら言えぬものである。幼い話者がコンプレー時代に「屋根、小石の上の日ざし、道の匂い」に魅きつけられたのは、それらが「見えるものの彼方になにかを隠している」と思われたからだったのとまったく同様に、話者は愛する女をとおしてその女以外のなにものかを愛しているのであつて、彼にとって女はその女が隠しているなにものかを見いだすためのきっかけにすぎない。したがって、女を愛しつつけるために

は、話者は彼女がなにものかを隠しもっていると信じこまなくてはならない。このように信じられなくなったとき、つまり女のすべてが話者にとって既知になれば、不可避免的に失望がやってくる。

このようにみれば、なぜ恋と嫉妬が一枚のコインの表と裏のように、話者の恋愛において切り離すことのできない関係にあるのかは自明だろう。アルベルチーヌの生活における話者の窺い知ることのできない部分が彼の嫉妬をよびおこすのではなくて、むしろ話者の嫉妬が、アルベルチーヌを魅力あるものとし、彼女への恋を存続させるために、彼女のなかに未知の暗い部分をつくりだすと考えるべきである。P.-V. Zima はアルベルチーヌの同性愛についてすぐれた見解を述べている。すなわち、話者が彼女の中に未知の部分を飽くことなく求める結果、女が女から得る快樂は永遠に男である話者の知ることのできないものであるの、話者は必然的にアルベルチーヌを同性愛者にしてしまうのであると(8)。

隠された物への嗜好が話者の恋愛を規定しているかぎり、愛は嫉妬によるかぎりない苦しみとしてしか存続できない。そして女の未知の部分が減少するにつれて(未知は既知となりうるがその逆はありえない)、話者の恋は弱くなってゆき、いつかはその女への失望と無関心に到達するだろう。

以上のように、スノビズム体験と恋愛経験が話者の隠された物を求める心的傾向性 — 直接性知覚への無能力、あるいは媒介性への嗜好 — によって規定され、その挫折の原因がこれらが話者の心的傾向性の現象型態としてあらわれるところにあるとすれば、無意識的想起による啓示経験がけっして突発的に起こるのではなく、起こるべくして起こった経験であることが判明するだろう。特権的瞬間による啓示経験も話者の心的傾向性に規定されているのであって、この心的傾向性なくしては考えられないような性質のものである。恋愛およびスノビズム体験において挫折した話者の隠された物への嗜好は、<或るもの>を<他のもの>の媒介によってもたらず無意識的想起による啓示経験によって満足させられる道を指し示されるのだ。

La nature n'était-elle pas commencement d'art elle-même, elle qui ne m'avait permis de connaître, souvent, la beauté d'une chose que dans une autre, midi à Combray que dans le bruit de ses cloches, les matinnées de Doncières que dans les hoquets de notre calorifère à eau? (III, p. 889)

「自然は芸術の始まりだ」という話者の評言は、彼の天職発見の道程に即して言

えば、「芸術は自然の終わり、完成型態だ」と逆に表現するほうが適切なのである(9)。「或るものの美を他のものによって」知るのが芸術の始まりなら、アルベルチヌによってバルベックへの欲望を満足させ、花咲く娘たちによって海的美を求めた恋愛も、ゲルマントという名の神秘をゲルマント公爵夫人という一女性によって満足させようとしたスノビズムも芸術への第一歩だったはずだからである。特権的瞬间による啓示経験は話者に、彼本来の嗜好に執着してこそ<文学>にいたるのだということ、<文学>だけが彼の嗜好を満足させることができ、<文学>と自身の嗜好に執着することは同一の行為を意味すると教えるのである。

Je me souviens avec plaisir, parce que cela me montrait que j'étais déjà le même alors [à Combray] et que cela recouvrait *un trait fondamental de ma nature*, avec tristesse aussi en pensant que depuis lors je n'avais jamais progressé, que déjà à Combray je fixais avec attention devant mon esprit quelque image qui m'avait forcé à la regarder, un nuage, un triangle, un clocher, une fleur, un caillou, en sentant qu'il y avait peut-être sous ces signes quelque chose de tout autre que je devais tâcher de découvrir (...) (III, p. 878)

特権的瞬间は≪un trait fondamental de ma nature≫—コンブレー以来根づいていた心的傾向性—が、そのままなんら変容を要せず、文学的方法に転化するという事実を啓示するのだ。方法と化した媒介性への嗜好、これを話者は≪mé-taphore≫とよぶのである。

註

1) Gérard Genette, *Figures* (I), Seuil, 1966, p. 49

このぼくの論稿の出発点は、P. -V. Zima, *Le désir du mythe* (Nizet, 1973) がRené Girard, *Mensonge romantique et Vérité romanesque* (Grasset, 1961) で説かれた欲望の自発性を否定し、欲望は対象への直線的な欲望ではなく、つねに媒介された欲望だという論理を社会学的に「失われた時を求めて」にあてはめ、プルーストを論じたのに対して、Girardの欲望の三角形、媒介された欲望という考えをもっと話者の問題に近づけ内面化しようと試みたところにある。そのため

の手掛りとなったのが前掲した Genette の論稿である。

- 2) 「失われた時を求めて」の引用はすべて *A la recherche du temps perdu*, Bibliothèque de la Pléiade, 3 volumes (Gallimard) による。引用文中の強調はすべて引用者によるものである。
- 3) ゴンクールの未刊の日記を読んだあと、話者は自分には事物を直接的に知覚する能力が欠如していることを自覚する。《(...) je ne m'étais jamais dissimulé que je ne savais pas écouter ni (...) regarder. (III, p.717)》, 《(...) j'étais incapable de voir ce dont le désir n'avait pas été éveillé en moi (...), ce dont je n'avais pas d'avance dessiné moi-même le croquis que je désirais ensuite confronter avec la réalité. (III, p. 719)》しかし、直接的知覚能力の欠如は同時に通常感覚には感じられない隠されたものを知覚する能力を意味する。このもうひとつの能力が知覚する対象は《à une certaine profondeur seulement (III, p. 718)》, 《à mi-profondeur, au-delà de l'apparence elle-même, dans une zone un peu plus en retrait (III, p. 718)》という領域に存在しているので、ふつう観察とよばれているものの役にはたたないのである。見るのではなく、透視する — 《(...) quand je croyais les regarder, je les radiographiais. (III, p. 719)》 — このような知覚形式はもちろんコンブレー時代の話者のそれと同一である。
- 4) Gilles Deleuze, *Proust et les signes* (P. U. F), 4^e édition remaniée p. 140.
- 5) 井上究一郎訳「失われた時を求めて」(I), 筑摩世界文学大系 57, p. 114.
- 6) “Cette manière d’imaginer les êtres est très fréquente dans l’enfance, et il s’agit bien encore, à Combray, de l’imagination d’un enfant; mais Proust répand ces surprises et ces chocs tout le long de son œuvre, il les rend indépendants d’un âge particulier pour en faire la matière d’une réflexion générale sur la connaissance psychologique.” Ramon Fernandez, *A la gloire de Proust*, Nouvelle revue critique, 1944, p.95
- 7) アルベルチーヌへの愛とゲルマント公爵夫人へのスノビズムとのあいだには著しい類似性がある。この事実は話者の恋愛とスノビズムは同じ根 — 彼の心的傾向性 — から派生していることのひとつの証明になるだろう。ゲルマント夫人へのスノビズムが恋愛感情と一体化していることをもちだすまでもなく、恋とスノビズムの境界が話者にあつては明確でないことは、バルベックの少女グループとの関係からも窺える。少女グループの属している社会階層がブルジョワジーであ

ると話者が知ったときの彼の反応は「プチ・ブルジョワ階層は、民衆の神秘も、ゲルマントのような社交界の神秘ももってはず、私の興味をもっともひかない階層だ。(I, p. 844)」である。話者はだからといって、バルザックの「ソーの舞踊会」の女主人公のように、貴族ではなくただのブルジョワだと判明した恋人をみかぎってしまうことはしないが、彼の恋愛にはスノビズム的感情がしみこんでいるのは否定しえない。話者が彼女たちに興味をもったのは、この少女グループがバルベックで《une race à part (II, p. 1113)》を構成していたことと無関係ではなかった事実は残るのである。ゲルマント公爵夫人が閉ざされたフォール・サンジェルマンを一点に凝集する秘められた中心であるように、アルベルチーナは海辺の町の「特別な種族」の核心なのだ。

8) Zima, *op. cit.*, p. 176.

9) voir Zima, p. 192.